外国語活動・英語科における　学び続ける子ども

附属小・中学校における外国語活動および英語科では，「一人一人が問いを持ち追求する姿」を次のように定義した。(i) 様々なことがらに関心をもって，自分の思いを広げたり深めたりする姿。(ii) 課題意識や目的意識を持ち，外国語活動や英語学習を通して自己の伸長を図る姿。(iii) 学んだことをその後の学習にいかしている姿。以下，これら３つの観点についてその背景と課題をまとめておく。

観点１　様々なことがらに関心をもって，自分の思いを広げたり深めたりする姿

この観点は，主として活動や学習の出発点において学習者をどのように動機付けるかという問題と関わるものである。外国語（とりわけ英語）の学習は，しばしば受験や就職に有利になるといった「外発的動機付け」によってなされる。しかしながら，このような功利性に基づく学習は必然的に「最小労力による最大利益」の原則に支配される。すなわち，試験などの得点に結びつく訓練に集中的に学習リソースが投じられる一方で，それ以外の側面が顧みられなくなってしまいがちである。このような学習は，実践的コミュニケーション能力の育成を目指す立場からはバランスを欠いたものであると言わざるをえない。

したがって，教師は児童・生徒をどのように「内発的に」動機付けていくかに関心を払い，そのために教材や指導を工夫する必要がある。また同時に，教師が内発的動機を完全にコントロールすることは不可能であるという当然の事実も十分に認識する必要があろう。児童・生徒の英語に対する関心のありようは多様であってよいし，その育成には時間がかかるものである。外国語活動や英語科でのひとつひとつの単元の学習を積み重ねることによって，中学校を終える段階で自分自身と英語の関係について健全な態度を持った学習者を育てていきたい。

観点２　課題意識や目的意識を持ち，外国語活動や英語学習を通して自己の伸長を図る姿

この観点は，主として活動や学習の過程と関わるものである。小学校外国語活動においては，英語を用いたタスク活動を通して，自己の意識や自己と他者の関係性に何らかの変容がもたらされることが期待される（例えば相手意識を持つことができるようになるなど）。また中学校英語科ではこれらに加え，英語運用力に関する自己の伸張も目指される。いずれの場合も，児童・生徒が観点１において自ら設定した課題に対して「どうすればよいか」を考え，試行錯誤を繰り返しながら「伸びていく自己」を感じられることが，次の観点３へとつながっていく。その際，教師は一人一人の児童・生徒の特性や相互の関係性，また彼らが得意とする学習スタイルを把握し，それに応じた支援をしていくことが求められる。

観点３　学んだことをその後の学習にいかしている姿

この観点は，主として活動や学習の成果と関わるものである。他教科と比較しても，とりわけ英語は学習した知識・技能を実社会でいかすことが期待されている教科である。国が求めている具体的目標は25年12月の文科省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」および26年９月の有識者会議報告「今後の英語教育の改善・充実方策について」で述べられている。現在の英語教育においては，グローバル社会で活躍できる人材となることがある種の外発的動機付けとして機能している（より正確には機能することが期待されている）といえよう。

われわれが定義した「いかしている姿」は，そのような結果としての実用的側面を決して否定するものではないが，より本質的には児童・生徒が一学習者として自らの内発的な問いから得られた答えをさらに高次の問いへと発展させていく姿を指している。「受験英語」と同様，「グローバル人材」もまた英語という言語の一面の功利性を捉えた抽象概念にすぎない。一人一人の児童・生徒が持っている問いは，より具体的で身近なものであるはずである。ここでも教師は児童・生徒の多様性を許容し，それぞれに合った「いかし方」を支援することが求められる。

（共同研究者：島根大学教育学部言語文化教育講座，縄田　裕幸）